



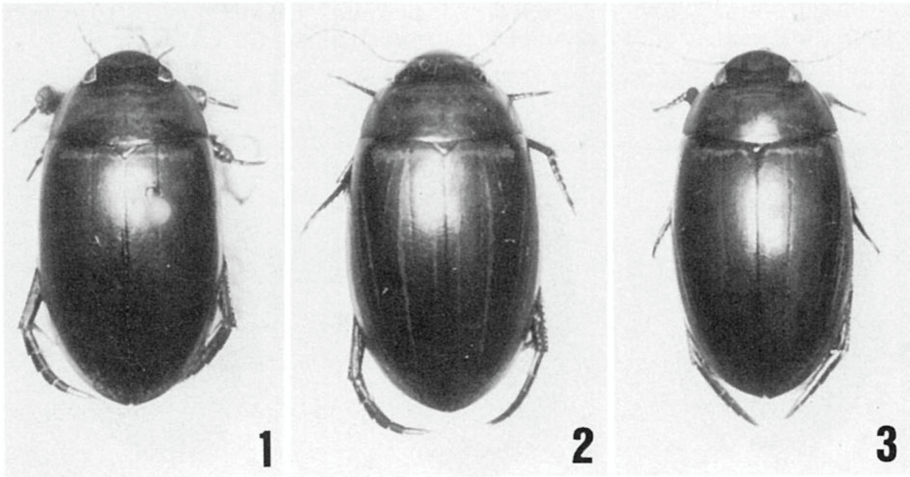
### オオシマゲンゴロウの学名\*

佐藤正孝・松本英明

いわゆるオオシマゲンゴロウを、佐藤 (1970) は *Hydaticus stagnalis* (FABRICIUS) の学名のもとに北海道から記録し、さらにこの種には雌雄2型が認められることを佐藤 (1984) が報告した。これは、神谷 (1938) および中根 (1964) によって従来 *Hydaticus transversalis* (PONTOPPIDAN) とされていた種を、前者の雌であるとしたからである。これらのことについて、中根 (1986) は古い文献に基づき、それも標本も見ないで推論を述べている。日本産種はともかくとして、せめて容易に入手できるヨーロッパ産の標本と新しい文献でも参考とされたらもう少し違った形での報文になったものと、その努力の程を惜しむものである。ただ、標本を見てさえも、少ない個体では佐藤の報文のような結果にならざるを得ない。確かに古い時代に記載された種あるいは近似種間に問題のある種などについて

は、日本で容易に基準標本の見られないもどかしさを感じるのは筆者らだけではないと思う。

さて、従来の *H. stagnalis* 近似種の同定については、ヨーロッパでもかなり混乱しており、多くのシノニムが作られたりしている状況である。日本産種については、つい最近まで少ない標本しか得られなかったこともあって十分に検討されなかった。幸なことに筆者の一人、松本が多くの個体を採集し、変異を明確にすることができた。またいっぽう、シマゲンゴロウ属について、ヨーロッパでは NILSSON (1981) が、北アメリカでは ROUGHLY・PENNELLY (1981) が相ついで再検討と整理の結果を報告している。そこで、それらの報文を参考として、改めて日本産のいわゆるオオシマゲンゴロウの学名についての検討を試みることにした。



第1-3図 *Hydaticus aruspex* CLARK, オオシマゲンゴロウ [北海道産]—1, ♂; 2, 3, ♀.

\* M. SATŌ and H. MATSUMOTO, Specific name of a Japanese *Hydaticus*-Species.

*Hydaticus aruspex* CLARK  
オオシマゲンゴロウ

*Hydaticus aruspex* CLARK, 1864, Trans. ent. Soc. London, (3) 1: 212 (China).

*Hydaticus laevipennis* THOMSON, 1867, Scand. Col., 9: 88.

*Hydaticus modestus* SHARP, 1882, Sci. Trans. r. Dublin Soc., 2 (2): 650.

*Hydaticus americanus* SHARP, 1882, Sci. Trans. r. Dublin Soc., 2 (2): 651.

*Hydaticus rugosus* POPPIUS, 1905, Öfvers Finska Vet. Soc., Förh., 47: 23.

*Hydaticus laeviusculus* POPPIUS, 1906, Rev. Russe Ent., 6: 58.

*Hydaticus stagnalis*: KAMIYA, 1938, J. Tokyo Nogyo Daigaku, 5: 50.—KAMIYA, 1938, Fauna Nippon., 10 (8-11): 105.—SATÔ, 1970, Bull. Jap. ent. Acad., 5: 14.—SATÔ, 1984, Coleopt. News, (66): 2.

*Hydaticus transversalis*: KAMIYA, 1938, J. Tokyo Nogyo Daigaku, 5: 50.—KAMIYA, 1938, Fauna Nippon., 10 (8-11): 107.—NAKANE, 1964, Fragm. Coleopt. Japon., (3): 9.

従来、日本でオオシマゲンゴロウ (*Hydaticus stagnalis*) およびイチモンジシマゲンゴロウ (*H. transversalis*) として記録されてきた種は、上記の文献リストやつぎの記載などに示した状況から、今後 *H. aruspex* CLARK, 1864 を使用するのが最も妥当と考えられる。

頭部は黄褐色で、後縁は黒くなるが、その中に横楕円の2黄褐色紋を有する。前胸背板は黄褐色；前縁は狭く黒色となるが両端に達しない；後縁は中央部に孤をえがいて幅広く黒色となるが、その黒紋は基部約1/3を占め、側縁に達しなく、また紋の両端は

上翅両側の黒色端部に連なる。

上翅は黒色で、側縁、基部横帯紋、縦条などは黄褐色となるが、いちじるしく変化がある。♂では、側縁は幅広く黄褐色となるが、中央より後方で乱れ、小黒点紋からなる不明瞭な縦条が入り込む；基部には横帯紋を有するが、側縁の黄色部と連なる個体もあれば、まったくこれを欠く個体まで多くの中間型が認められる。♀では、側縁は幅広く黄褐色となるが、中央から後方で黒点縦条が入り込む；基部の横帯紋は幅広く、側縁の黄色部に達する個体と達しない個体があり、中央部で消失する個体もあるなど変異が多い；5本の細い縦条を有するが、第2条はほとんどの個体で消失傾向にあり、ときにかすかな第5条を残してほかは消失する個体もある。上翅表面は二様に点刻され、小さい方は細かく密で明瞭であるが、大きい方はまばらで浅いため認めにくい。♀の上翅端はやや突出する。

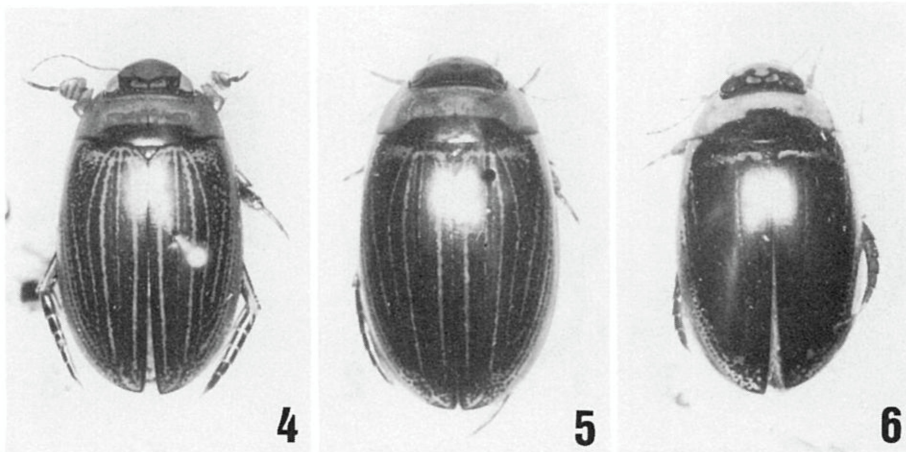
前・中肢は赤褐色、後肢は暗赤褐色となるが、その度合は変化が多い。体下面は黒色で褐色を帯びる部分もある。しかし前胸腹板は褐色で、その突起は暗色となる。

前肢の爪は、基部がやや膨れ、♂では基部1/3近くで強く曲り、♀では全体ゆるやかに曲る。後肢の爪は、♂♀ともに外爪は内爪のほぼ1/2の長さ。

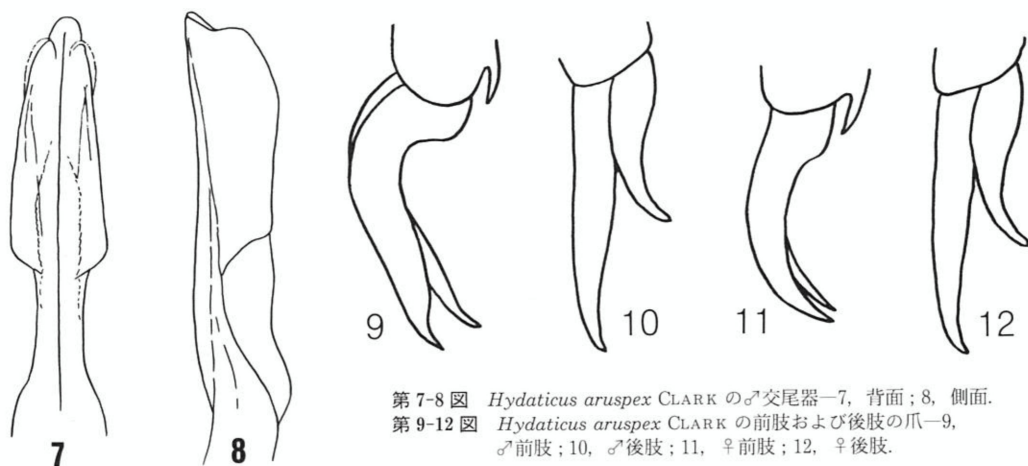
♂交尾器は、基部近くで強く曲り、中央部でくびれる；先端部はやや斜めに切断状となるが、上端角は丸まる。体長：14-15 mm。分布：旧北区、新北区；日本（北海道）。

日本産の個体は、上に記載したように、かなりの変異があつて斑紋だけでは近似種との明確な区別ができないことがある。従来混同されてきた近似2種との区別はつぎのようである。

*H. transversalis* (PONTOPPIDAN, 1787) 体長12-13.5 mm。上翅側縁の黄縦条はより幅広い。後肢の外爪は内爪の1/2より短い。



第4-5図 *Hydaticus continentalis* J. BALFOUR-BROWNE [ヨーロッパ産]—4, ♂; 5, ♀.  
第6図 *Hydaticus transversalis* (PONTOPPIDAN) [ヨーロッパ産], ♀.



第7-8図 *Hydaticus aruspex* CLARK の♂交尾器—7, 背面; 8, 側面。  
 第9-12図 *Hydaticus aruspex* CLARK の前肢および後肢の爪—9, ♂前肢; 10, ♂後肢; 11, ♀前肢; 12, ♀後肢。

*H. continentalis* J. BALFOUR-BROWNE, 1944 [= *H. stagnalis* (FABRICIUS, 1787)] 体長 13-14 mm. 体はより丸味がある。上翅は♂♀ともに数本の細い明瞭な黄縦条を有する。前胸背板後縁の黒横帯両端は上翅側方の黒色部に達しない。上翅の大きい方の点刻はより強く密である。

オオシマゲンゴロウは、新・旧両北区に広く分布するようであるが、日本では北海道だけから記録されている。日本での分布については、これまで北海道と本州とされてきたが、本州で実際に採集された標本に基づいた記録は近年まったくない。分布に本州が加えられているのは、松村 (1916) による目録からの引用が継承されたままになってきているようである。そこで、この際改めて確実な標本が得られるまで本州を分布から除いておきたい。

検視標本: 1♀, Tetsunan, Abashiri, 3. iv. 1966, Y. Itô leg.; 1♂, 1♀, Kushiro Moor, 3. vi. 1978, S.-I. UENO leg.; 1♀, Kuranuma, Asahikawa, 26. v. 1985, H. MATSUMOTO leg.; 1♀, Kushiro, 22. vii. 1986, K. ISHIDA leg.; 5♂♂, 3 ♀♀, Wakasakanai, Toyotomi-cho, 14. ix. 1986, M. MORI leg.; 15

♂♂, 12♀♀, Wakasakanai, 23. ix. 1986, H. MATSUMOTO leg.

末筆ながら、標本・文献など多くの便宜を計って下さった A.N. NILSSON 博士, 上野俊一博士, 森正人氏, 酒井雅博氏に厚くお礼申し上げる。

主要参考文献

松村松年, 1916. 日本昆虫総目録, 第2巻甲虫之部 (未完). 昆虫学雑誌, 2. 附録: 49-54.  
 中根猛彦, 1986. 北日本のゲンゴロウ類同定についての覚え書. 東北の自然, (22): 16-19.  
 NILSSON, A.N., 1981. The Fenoscandian species of the genus *Hydaticus* LEACH (Coleoptera, Dytiscidae). *Ent. scand.*, 12: 103-108.  
 ROUGHLEY, R.E. and D.H. PENGELLY, 1981. Classification, phylogeny, and zoogeography of *Hydaticus* LEACH (Coleoptera: Dytiscidae) of North America. *Quaest. ent.*, 17: 249-309.  
 SATÔ, M., 1970. The collecting record of two *Hydaticus*-species from Japan (Col.: Dytiscidae). *Bull. Jap. ent. Acad.*, 5: 14.  
 佐藤正孝, 1984. 日本産水生甲虫類の分類学的覚え書, II, 甲虫ニュース, (66): 1-4.  
 (佐藤: 名古屋女子大学, 松本: 北海道旭川市)

○八溝山のナガゴミムシ類

甲虫談話会の第4回採集会 (本号8頁参照) に参加して、八溝山で採集したナガゴミムシ属 *Pterostichus* は9種であった。このうち、八溝山の地域特性をしめす、いわゆる分化型の種群で、分布模様の比較的によくわかっているものは、1) 広義のナガゴミムシ亜属 *Pterostichus* s. lat.; 2) クロナガゴミムシ亜属 *Eosteropus*; 3) ホソナガゴミムシ亜属 *Melanis* などに属する7種である。(1)に属するハラトゲナガゴミムシ *P. (P.) spiculifer*, ミヤマナガゴミムシ *P. (P.) rhanis* は、日光・那須地方に分布する基亜種と同型で、ミズギワナガゴミムシ *P. (P.) asymmetricus* も日光型とほぼ同様である。フタトゲナガゴミムシ *P. (P.) mirificus*

は、東北地方に広く分布し、八溝山地では南端の筑波山まで分布するが、日光からは知られていない。アブクマナガゴミムシ *P. (P.) nishiyamai* は、八溝・阿武隈両山地の特産種と考えられる。(2)に属するニセクロナガゴミムシ *P. (E.) fuliginus* は、東北地方に広く優占的に分布する種で、日光には別種が分布する。(3)の *P. (M.)* sp. は、八溝・阿武隈両地に固有である可能性が強く、東北・上越両地方には、それぞれ近縁の別種が分布する。以上のことから、八溝山で採集したナガゴミムシ属の分布型による類別は、北関東 (日光) 型3種; 東北型2種; 固有 (八溝・阿武隈) 型2種ということになる。(千葉県船橋市, 笠原須磨生)

## ○シモヤマミズギワゴミムシ群馬県の記録

シモヤマミズギワゴミムシ *Bembidion (Neomphanes) shimoyamai* HABU は青森県より記載された種で、背面が青藍色に輝く美麗種である。やや古い記録ながら筆者は群馬県内において下記のとおり本種を採集しているので報告する。おそらく関東地方では初めての記録と思われる。

8頭、群馬県利根郡水上町奥利根湖, 30. x. 1977.

採集地は奥利根湖北岸の広い沢状になった所で、倒木の樹皮下よりクロチビカワゴミムシ *Tachytana GYLLENHAL* とともに得られたものである。本種の採集例はきわめて少ないものであるが、あるいはこうしたやや特殊な生息場所によるためかもしれない。

末文ながら標本の同定並びに発表をお勧め下さった森田誠司氏に厚くお礼申し上げる。

(群馬県伊勢崎市, 須田 享)

## ○ニセヒメエンマムシの分布記録

ニセヒメエンマムシ *Margarinotus agnatus* (LEWIS) は従来、本州西部以西からのみ分布が知られていたようだが、最近平野(神奈川虫報84号, 1987)により神奈川県における多数の採集例が報告された。筆者も東京都で採集しているほか、群馬県などで採集された標本を所有しているので報告しておきたい。

1頭、群馬県赤城山, 27. vi. 1987, 長島洋二採集; 2頭、東京都稲城市坂浜, 9. v. 1987; 1頭、同町田市小野路, 14. viii. 1979; 1頭、同青梅市黒沢, 13. iv. 1979; 1頭、山梨県御座石温泉~鳳凰山, 1. viii. 1987, 以上、露木繁雄採集。

末尾であるが、貴重な標本を恵与された露木繁雄、長島洋二の両氏に心からお礼申し上げます。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

## ◇訂正

筆者は本誌79/80号で奈良公園のオオキノコムシ2種を報告したが、その内の1種キオビチビオオキノコムシ *Spondotriplax flavofasciata* CHŪJŌ はカタモンチビオオキノコムシ *S. horioi* NAKANE et NOBUCHI であることが判明したので訂正したい。

カタモンチビオオキノコムシは図鑑類では上翅肩部のみに赤紋が出ると記されており、上翅中央後部に紋が出る個体は現在まで知られていない。今回採集した7頭すべての上翅肩部および中央後部に赤と言うよりは黄色の紋が現われていたため同属のキオビチビオオキノコムシと見誤ったものである。

末尾であるが、同定の労をとられた中條道夫先生、ならびに中條先生に同定をお願いしていただいた鈴鹿市の市川展行氏に厚くお礼を申し上げます。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

## ○クリバネチビシテムシの北限(チビシテムシ科分布資料6)

クリバネチビシテムシ *Micronemadus pusil-*

*limus* (KRAATZ) は、旧北区の東アジア部と東洋区の広い範囲に分布していると思われるチビシテムシで、有名なウォーレス線の東側からは記録がなく、南限は今のところバリ島(未発表)である。一方、北限は北海道となると思われるので報告しておきたい。末尾ながら多数の本科甲虫を恵与された北海道大学の原昌宏氏に厚く御礼申し上げます。

45頭、北海道石狩支庁野幌, 27. vi. 1986; 12, 26. iv. 1987; 12. 28. ix. 1987, 大原昌宏採集。

(神奈川県座間市, 西川正明)

○アツバコガネ亜科 *Phaeochroops* 属の性差

長梅雨の中の休日を利用して、3年前にボルネオで採集したアツバコガネ亜科の同定にとり組んでみた。採集した約1300頭の内、約半数は *Phaeochroops emarginatus* フチトリアツバコガネであったが、少数の *Phaeochridius* 属を除いた残りは *Phaeochroops* 属のものであった。この属は、日本周辺からは台湾に *P. taiwanus* NOMURA を産するだけで、東南アジアに分布の中心があり、黒褐色~赤褐色で通常背面と側縁に多数の剛毛があり、一見して他と区別できる特徴を備えている。KUIJTEN (1981) は、本属の再検討を書いているが、基準系列の標本を再検して♂交尾器等を図示しており有用である。

比較的均一な特徴を持つものを、多数処理する場合、可能なら体長や色彩で大きく分け、次に雌雄に分けてみるのが常套であろう。しかも、いずれも肉眼で識別できた方が能率がよい。

本属の場合、性差は KUIJTEN (1981) によれば 1) 大顎は♂でより拡がり、♀より突出し角張る 2) 前附節の爪は♂で前節より少し短く、♀でかなり短い 3) 中・後附節の爪は♂で長い 4) 後付節は♂で比較的細い〔あるいは細長い〕 5) 後脛節の端刺は♂で比較的長い 6) 後脛節の端棘は♂は♀より長く密 7) ♀は♂より幅広、の7点が掲げられているが、肉眼で識別できるのは最後のものだけで、それにしても確実に識別できるとはいいがたい。

筆者が確認した最もよい区別点は、♂の附節が♀より確実に長く、特に後附節では後脛節とほぼ同長となることである。これは肉眼での識別に充分たえられる特徴である。KUIJTEN の掲げた 4) は細長いとも読めるが、比較的ではなく確かに長い。この特徴は東南アジアに産する本属の *P. acuticollis*, *P. freanae*, *P. gilleti*, *P. lakhonicus*?, *P. peninsularis*, *P. rattus*, *P. silphoides* のほか、未記載と思われる2種にも適用できた。なお先に掲げたフチトリアツバコガネもこの点で雌雄が識別できる。

## 引用文献

KUIJTEN, P.J., 1981. Zool. Verh., Leiden, (183): 3-76, pls. 1-4. (神奈川県座間市, 西川正明)

## エンマムシ類数種の習性

黒沢 良彦

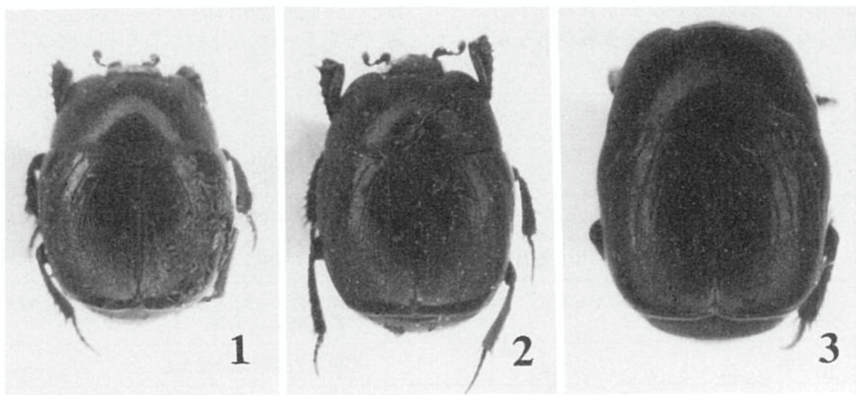
昭和24年(1949)5月9日の正午頃、福島県南会津郡館岩村湯の花温泉の奥、湯の岐川の本谷と渡沢の合流点近くの川岸にある小さな砂地の側に昼食をとるべく腰を下した彼は、乾いた砂地に時折り飛来するアイヌハンミョウに注意を奪われていた。あたりの山々はまだ残雪に覆われ、木の芽もまだほとんど萌出してはいなかったが、陽射しは強く、砂地は乾き切っていた。その瞬間、ハンミョウを求めて見張っていた砂の面になにか小さな黒いものが蠢めいたのを彼の眼は見逃がさなかった。素早く砂ごとすくい上げた彼の掌上には、彼がかって神奈川県鎌倉の海岸の砂浜で沢山採ったことのあるハマベエンヤムシ *Hypocaccus varians* (SCHMIDT, 1890) にそっくりなエンマムシが動いていた。あんな海浜とこんな山奥、同じような砂地でも同じ種類が棲んでいるとはとても考えられない。彼の眼はたかだか数坪にすぎない砂地の上を睨め廻し始めた。1頭だけというはずはない。だがいない。どこを眺めても乾いた砂ばかりで虫影は全くない。なかば諦めかけた頃、いたゞさっきの虫影を見つけた所より多少はなれた所の砂の上にまた同じ種類のエンマムシが動いていた。それを殺虫管に収めて、また砂上を眺めるとまた1頭。そして、しばらくすると別な所にぽっかりとまた1頭。乾いた砂の上にはたまたまに飛来するアイヌハンミョウ以外に虫影は全くないのだが、その乾いた砂の面を睨んでみると、どこからともなく忽然と意表外の所に現れて来る。その現れ方はまさに湧き出して来るとしか表現のしようのないものであった。彼とエンマムシの根くらべが始った。春の昼さがり、額に汗しながら一生懸命に乾いた砂の面を睨んでいる若い男の姿は異様とも思えたのであろう。村人が遠くから胡散臭そうに伺っていた。結局彼は小1時間ほどの間にエンマムシを20余頭採

集していた。このエンマムシは一体砂の中ではどんな生活をしているのであろうか? 疑問を持った彼は最後にここぞと思う所の砂を掘り起してエンマムシを探してみたが、それまでに採り尽してしまっていたのか、虫影を見ることなく徒労に帰ってしまった。

湯の花での採集に味を占めた彼は、その後昭和26年(1951)の4月28日にも、福島県北会津郡東山村(現在は会津若松市東山)の東山温泉の奥にある川溪部落近くの湯川の溪側の同様な砂地で、やはり快晴の昼下りに、同様の方法で同じ仲間のエンマムシ4頭を採集した。しかし、今度の種類は湯の花の種類に較べると、多少小形で明るい銅色を帯び、点刻の状態が多少異っていた。また、これより先、昭和24年(1949)の8月2日には、当時中学生だった米山高義氏が北会津郡大戸村芦の牧温泉(現在は会津若松市芦の牧)の大川の河原で、同様の砂地で、やはり同属のエンマムシ2頭を採集して来た。この種類は湯の花や川溪のどちらの種類よりも大きく、黒色で光沢が弱く、背面の点刻の状態も異っていた。

これら3種のエンマムシはハマベエンヤムシ属 *Hypocaccus* に属することはすぐに判ったが、日本から記録されている数種類は、ハマベエンヤムシを除き、すべて少ない種類と考えられ、そのうえ皆海浜性とされているので、種名を決定することが出来なかった。しかし、海浜性と考えられているハマベエンヤムシ類が3種までも会津盆地、それも盆地周辺山中に産するのは彼にとって驚くべき発見であった。

彼がこれら3種の砂地に棲むエンマムシの種名を正確に固定出来たのは、それから30余年を経た後のごく最近のことである。因みに、湯の花のエンマムシは、ヤマハマベエンヤムシ *Hypocaccus subaeneus* (SCHMIDT, 1890)、川溪のものは、カ



福島県会津地方産ハマベエンヤムシ類: 1. カラカネハマベエンヤムシ(会津若松市川溪); 2. ヤマハマベエンヤムシ(南会津郡館岩村湯の花); 3. ニセハマベエンヤムシ(会津若松市芦ノ牧)(共に猪又敏男氏撮影)

ラカネハマベエンマムシ *H. lewisii* (SCHMIDT, 1890), 芦の牧の種類は, ニセハマベエンマムシ *H. sinae* (MARSEUL, 1862) に同定することができた. このうち, 山地に産することが知られているのは, ヤマハマベエンマムシだけで, 他の2種は今でも海浜性と信じられている. 前者の和名は山住みの浜辺闇魔虫の意であろうが, いささか矛盾した和名で気になって仕方がない. それとも溪畔の砂地もやはり浜辺と云うのであろうか.

会津地方のハマベエンマムシ類について記したついでに, 同地方で得たエンマムシ類2種について記録しておく.

イブシエンマムシ *Hister congener* SCHMIDT, 1885.

1頭, 福島県南会津郡岩村湯の花, 1. v. 1948, 星 裕次郎採集; 1頭, 福島県会津若松市青木山, 26. vi. 1949, 五十嵐敬治採集.

少ない種類とされているが, 会津地方では低山地にそれほど稀な種類ではなく, 馬糞などにもよく来

ていた. ただし, 同一の場所で同時に複数の個体を採ることはほとんどなかった. ほかにかなりの数を採っているが, 現存しているものは上記2頭だけである.

ハコネエンマムシ *Margarinotus sutus* (LEWIS, 1884)

1頭, 福島県会津若松市大杉, 11. v. 1947, 黒沢良彦採集; 1頭, 会津若松市背炙山, 28. v. 1947, 黒沢良彦採集; 1頭, 会津若松市青木山(地図には奴田山と記されている), 2. v. 1948, 黒沢良彦採集; 1頭, 福島県大沼郡永井野村蛇喰(現在は会津高田町), 25. vi. 1949, 黒沢良彦採集.

本種も少ない種類とされているが, 会津地方ではそれほど少ない種類ではなく, 主として朽ち木中に棲み, 冬から春にかけてのオサムシ採集の折に朽ち木中によく発見した. 一般のエンマムシ類の様に腐敗物や糞には来ない. 会津盆地周辺の丘陵地でかなりの数を得ているが, 現存するのはやはり上記の4頭だけである. (東京都世田谷区)

### 宮島の黒いフタオビノミハナカミキリ

#### 今 坂 正 一

今年(1988)は春が遅く, 4月20日を過ぎても山口・広島両県内にまともにカエデの花をすくえる場所が見つからなかった. いろいろ考えた末, 中原龍雄氏の助言を入れて, 確実に花があると思われる広島県宮島(厳島)を訪れた.

宮島は対岸の広島県大野町の宮島口棧橋よりフェリーで15分, 近い所では1kmほどしかない. 船で渡ると正面に旅館街, そして右手に厳島神社の境内が広がる. 町の裏手はすぐモミの大木とイロハモミジ, そして常緑広葉樹のうっそうと茂った林で, ところどころに鹿が寝そべっており, 奈良公園を彷彿とさせる. 海岸近くでオオチャイロハナムグリやヒゲナガカミキリも取れていて, やはりここは並の島ではない.

4月25・26両日, 町の裏手のモミジ谷を中心に島中を歩き回った. 気温が低く, 多少風があったも

ののカエデの花は満開で, 少ないながらカエデヒゲナガコバネカミキリ, コジマヒゲナガコバネカミキリ, ヒメクロトラカミキリ, トゲヒゲトラカミキリ, ヒナルリハナカミキリ, キバネニセハムシハナカミキリ, そして, フタオビノミハナカミキリ 18♂♂ 19♀♀ を採集した.

最初の1頭が網に入った時, 「アレッ」と思った. とても黒いのである. 「なんか違うな」と思いながら, 普通なら2~3頭でやめるところを, なるべく取ることにした. カエデの花以外にもサルトリイバラの花や種名不明の花, 樹葉上でも取れた.

帰宅してから, 手持ちの他産地のものと比較してみた. 長崎県島原市産(写真1~4)を始め, 伯耆大山, 四国剣山, 奈良市春日山・対島など西日本のものは, ほとんど同様で全体的にずっと淡色であった. 宮島産(写真5~8)と比較してみると次のようになる.

	島 原 産	宮 島 産
頭	背面は黒褐色. 側・後縁は赤褐色 腹面は黄褐色	背面は黒褐色. 側・後縁は赤褐色にならない 腹面は黒褐色
前 胸	背面は黒褐色. 前・後縁は赤褐色	背面は黒褐色. 前・後縁は赤褐色にならない
腹 部	♂では黒褐色で, 先端3節の中央部は黄褐色	♂では黒褐色
上 翅	基部・合わせ目・外周は広く赤褐色, それ以外の地色の濃色部はより淡い	基部・合わせ目・外周は狭く褐色, それ以外の地色の濃色部はより黒い
触 角	黄褐色	褐色で先端数節は黒づくむ
肢	中・後腿節上面先端付近に黒色紋, その他の部分はすべて黄褐色	腿節は基部を除いて黒褐色 中・後脛節は黒褐色 その他の部分もいく分なりとも黒づくむ

♂交尾器については、宮島産と島原産に顕著な差は見い出せなかった。

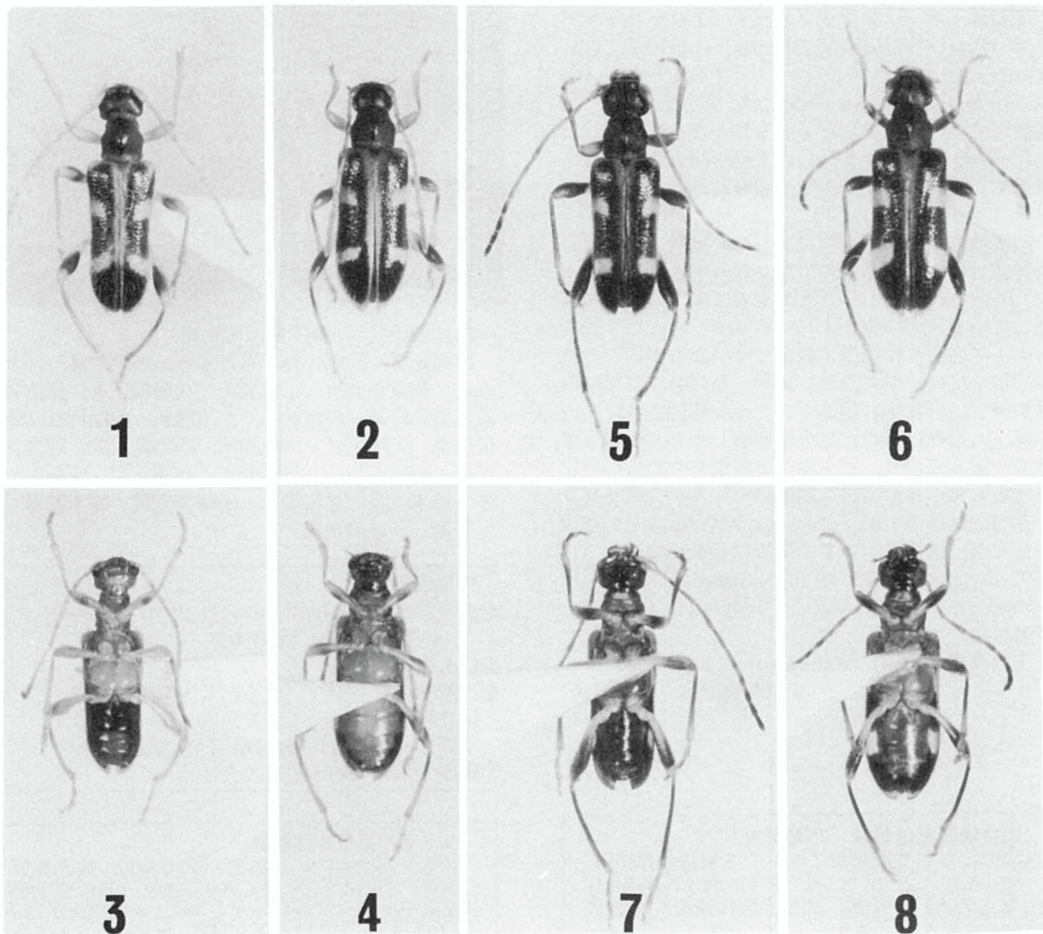
本種には、ニセフタオビノミハナカミキリという近似種がいて、中部山岳や関東の山地では高地で両種が混生する。特に奥日光などでは2種ともかなり黒化している(ニセフタオビがより黒い)。宮島産は、奥日光産ニセフタオビよりさらに黒く、前胸背側縁の突起はより弱く、頭頂も盛り上らないので、はっきりと区別でき、明らかにフタオビの範疇に属する。そして、多分、日本中のフタオビ中、最も黒い個体群になるものと思われる。対岸の広島県を始めとして、近畿以西の西日本産フタオビとは明らかに区別することが可能で、奥日光など北関東の高地の個体群にやや近い。

水野(1983)\*は、*Pidonia* 属の解説の中で、本属において種内変異を考える時、黒化の度合の高いものほど原始的であり、淡色化するほど進化したものであろうという意味の事を述べている。

とすると、宮島産フタオビノミハナカミキリは、種内で最も原始的な形質を持っていることになり、対岸の広島県を始め、西日本各地の個体群が、次々と新しい形質を獲得し、広がっていったにもかかわらず、本土から目と鼻の先にある小島で、祖先的形質を温存させてきたことになる。

末筆ながら、宮島行きをすすめて下さった中原龍雄氏に心より厚く御礼申しあげる。

\*水野弘造(1983)月刊むし(153):19-22.



1~4: 島原市上木場産フタオビノミハナカミキリ, 5~8: 宮島産フタオビノミハナカミキリ,  
1. 3. 5. 7.: ♂, 2. 4. 6. 8.: ♀, 1. 2. 5. 6.: 背面, 3. 4. 7. 8.: 腹面.

(長崎県島原市)

◇お知らせ◇12月例会と恒例の忘年懇親会を12月18日(日)に予定しております。詳細については改めてご通知いたしますが、早速、予定表にご記入のうえ、ご記憶ください。(世話人)

## ○千葉県未記録の歩行虫の記録

千葉県の歩行虫類は、笠原(1982)によってハンミョウ科も含めて287種が報告されている。筆者は、これに未収録の2種を所持しているので記録しておく。

ブリットンツヤヒラタゴミムシ *Synnchus orbicollis* (MORAWITZ)

1頭, 木更津市小櫃川(砂地の腐肉トラップ), 25. viii. 1985, 谷 晋採集。

キュウシュウツヤゴモクムシ *Trichotichnus vespertinus* (HABU)

1頭, 安孫子市, 21. ii. 1976, 筆者採集。

末尾ながら貴重な標本を恵与くださった谷 晋氏にお礼申し上げる。(横浜市鶴見区, 田尾美野留)

## ○ケシマグソコガネ類2種の食性について

筆者は、ホソケシマグソコガネ(アラゲケシマグソコガネ) *Trichiorhyssemus asperulus* (WATERHOUSE) と、コケシマグソコガネ *Rhyssemus samurai* BALTHASAR の成虫が、飼育下において、腐葉片や小昆虫の潰したものを食すことを報告したが\*, 野外においても、この2種が明らかに腐葉を食していると思われる生態を観察したので記録しておく。

観察地は、河岸近くの浸水しない場所で、観察した個体は釣り人の通る道のかたわらに生えるギンギン *Rumex crispus* の葉が地表に接地したまま腐蝕している状態の腐葉下にいるもの、および、砂をかぶって埋もれた状態の腐葉についてのもなどである。なかには、やや斜めに裏返った体勢で腐葉に口器を当て、摂食中の個体もいくつか確認された。雨の降った翌日の晴れた日中に観察したが、砂質土壌はやや湿っており、ギンギンの腐葉もやわらかい状態であった。なお当日、同所でセマルケシマグソコガネ *Psammodius convexus* WATERHOUSE も採集したが、食性についての確認はしていない。

*T. asperulus*, 166頭; *R. samurai*, 23頭; *P. convexus*, 埼玉県三郷市江戸川畔, 24. v. 1988, 筆者採集。

\* 玉置真司(1986), *Kinokuni*, (30): 1-3.

(東京都葛飾区, 玉置真司)

## ○採集会報告

甲虫談話会第4回採集会は、八溝山と花園山を選び、茨城県大子町の浅川温泉を根拠地として、5月28~29日におこなわれました。当採集地は、関東と東北地方の接点として興味深い地域ですが、交通不便のため、ふだんは足を向けにくい所です。今回は、ネクイハムシ研究会の参加と、水戸昆虫研究会の協力を得て、参加者は28名。まずまずの天気恵まれて、各自相応の収穫と懇親の機会を楽しみ、盛会裏に無事終了いたしました。ご協力を頂いた水戸昆虫研究会の諸氏、ならびに宿を紹介して下さったTTS昆虫図書の前波哲也氏にお礼申し上げます。(世話人)



参加者氏名(ABC順, 敬称略)

阿部光典, 萩原 昇, 平野幸彦, 市毛勝義, 井上尚武, 笠原須磨生, 小宮義璋, 久保田正秀, 黒佐和義, 黒沢良彦, 松本浩一, 宮川澄昭, 成田行弘, 新里達也, 大桃定洋, 岡島秀治, 岡島賢太郎, 岡島礼次郎, 岡島由利子, 齊藤明子, 齊藤秀生, 曾根信三郎, 鈴木 互, 立川周二, 田尾美野留, 露木繁雄, 上野俊一, 渡辺泰明。

## 甲虫談話会

会費(一ケ年)3000円, 次号は12月下旬発行予定

投稿切は11月末日

発行人 上野俊一

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364)2311, 振替東京 0-60664

印刷所 創文印刷工業株式会社

## 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭W針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京(3)21129

電話(03)409-6401(ムシは一番)

FAX (03)409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

## タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下¥1,300, 4個以上¥850(以下同様), 第2地帯¥1,500, ¥950, 第3地帯¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

## タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話(03)811-4547, 振替 6-113479